新田
切
陸
本
石
県
九

へ13
3558
5

門 へ13
號 3558
卷 5

早稲田大學図書館
昭34.6.3 購
藏書

新功田

柱石傳初輯卷第五

第九回　特勇英士縛山岳

雪ふる木毎に花ぞさかりよる。とかの貫之へ詠じん。あゝ常陸にその名さへ。山さへうたた筑波の梯仰向れば。千仞の巖石雪に埋まて水晶山の景勢を見る。視下せば万株悉花開て常盤の松も色彩奪ふる。弐遠近に回まば長路森然たる双樹の雪へ白浪天に播ふると疑る。その風景筆に もつたゞ語るに詞もわるゝて。況ゆや文人墨客の。ちに進ぞ一ちほの真こそ。ゆるめ冬の日の。瞻望へ雪に増さものゝ。るげきを加るあの身にへ何ぐ心の慰さゞびさ門海太郎へ草賊が。導に路を測るまゝ。あゝ所へ来がまべ。

かの草賊は小腰を屈め。これなる山とぞ當国第一。筑波ゆくはるか此山の
乾のかたへ。しばらく行くが棟梁なる筑波太郎が山寨なり。これまでの通ひは嶮路にて。
平生さへ歩行しがたく。ましてや雨雪の降りには甚だ困じけるに刀祢は蹈馴
なければ一歩づゝに心を着て歩みたまへと。いふぞ内海太郎は点頭く。汝は
くも按内をしてくれよ。然らばとて是より乾の方へ。山寨にわたりたり。汝彼処へ至
りなば。暗計の賊等を変詐て木戸を離れ。門の外よりとて祠に程終ら
ねよ。たちの樹林がさくと鳴ると聞くば忽地に頭を上げる賊の徒太
郎が按内をして来よし。草賊を立て立歩り。餘り帰るの遅きぞおそれ。兄
て来よと棟梁の指揮によりて。ここまで来たり。你達は何なるものにて。貯
ねがはしく障まりける。これは暗計のものは居らぬぞ。跡なる和郎は兄弟なる雄

士何なるかも合点ゆかずと猜疑せるにぞ按内して来つる賊は足をやめ。
迎ひの賊が傍へ身を寄せ声を低めて如此々々といふに賊等は仰天し。然すれ
ば彼処の少年は暗計のもの歟なり。這奴はそれの勇を持てこまこと死地へ
いりたるか。めでたく死き奴を遅ぞ欺きおびき寄て縛うち殺ゆしてくれん。然れ
ばまた這奴もあやしくは覚ゆるものなれば漫りにして過ちせる謀にて討ちなば
万に一ッも仕損ずまじといふ程も可ね早く雄の若ものは此かくと太郎が前
にぞ進みける。太郎は彼等に信と眼をつけ。汝等は此の山寨に隠れ住む草
賊なるに。昨夜高原へ押いりて。七歳か八歳の女の童を拐て来つるとこの賊
が言すにより其童を把戻さんため来りたり。汝等若も吾に對して野心を
挟まばこれまでも武士命を的に雌雄を決せん。残毒無智の汝等なれば物の

善悪の品々まへねん。今戦国の弊に乗じて。諸国に群盗蜂起る。深山出没して
栖とゝろ。わるさの悪業をなすものゝ。まゝ。とゝいへども家門の男女一個も餘さず斬
害して。金銀資財を奪ふのゝち人を殺し勾引して。極重悪の老幼さらに
なし。この山の主領のこと四重五逆の罪ゆも超へて。いと憎むべきの山賊
の児を主領と仰ぎ。棟梁と敬ふ。汝等。勢ひ多くして出や。彩どろる
罪咎犯してまゝ何わどの栄和を計るや。玄々素雪の寒気。袒ゆも草鞋を
履て岳に登る。山岳登り渓に下り。かの主領に責遣はる。人家に扣る時
ゆ至りて。身を捐命咎矢ふるゝと頼む。資財雑具咎奪ふ。牛馬
に乗る。膂力を労して。明くる深山に跡をかくす。木傳ふ猿の叫ぶこゑ。
妻子ふ鹿の声。咎ゆて。終夜の友とする。天地廣けれど白晝にも。

街衢出ずるゆ怪しむべき。見るゝどゝに心を労し。身を苦しめて畢竟に口を
糊するばかりの想模なり。汝等愚痴の白徒なるまゝども。それぞの理に従ま
ずわれ。今より心を改めて。吾に従へ。後ぐに。然すれば后こゝを。ゆる
の時に至るべきと大なる辛苦なんと。彼をゝこれをゝ入りて言変ふ
いひなるまゝ。中ゆも少し年重なる。賊に甚だくるを着て。まゝくいとも愚
ゆして。そもゝの道理も明らめず。今までわるさ。悪業に募るゝ
とこそ安らう称。今一刀称の暁に咎ゆて。朝日に向ふ氷のごとく。まこと見
夢の醒るごとし。こゝより心を猶し。刀称に乗ひ。乗らせんに罪をべ
許しゆ。ゆれと。額着わどに残まる賊ども。第一甚だに跪まりて。一般に額
着ゆ。こゝ入て太郎に中に。這奴山賊かどゝりの。一言咎にてあつくゆ。

曉うべうもなりぬべ。斯のごとくして乳を弛すせ。騙ー討計校ゆやと。五分の疑ひ弦あをものうう。さらふ心い許されど。彼等弦ちうすて。まもくと。芋を奪ひかくさえのめと。忽地面を和らげて。汝等いあうるぎ。前せー言葉ゆゑうて先非を悔。邪非乃の業弦捐。ゴまてよ往ひ屬んとうう。昨夕奪ひー雅児をうく此処へ連てまよ。さすまべ吾よ往よの実を明すのうう。いうみくとうのうを。賊い所をうち擂げて。命まる処逸さふ。その処をいくのへどそへゴまくグ膂力ゆそへ。あうく恠ひひつど。いうよとうのうよ甚貌をふうぎらぢ。都て女性い棟梁の居間の傍よさやうう。れく甚処へくうの恠ひぢ。曲て彼処へ往んとすまべ。賊暇計ゆもそまくの宦人ゆうてこまを乳ー。欺矩をべ乳ーいうひべ。あうのうへ恠ひぐて。ゴまく刀称のくう引ーて。掴へ按内ー

命うせんよ。彼処へいうて把房ーね。ゴう棟梁と作ぐ人も。今とそゆまとそのの首へ。処の何甚と称へらまてうる。武士ゆそゆりーとう。然まべうるく吾ごゑ。思純の者よゆうみべ。刀称の寛仁大度るる。れ詞をのて暁ーのべ。頓ーよ領掌いうすべーとうふ。太郎いふ応ぢて。ちうまべ你を按内ーてその山寨へ伴へふとゆまて賊等へうあぐう。太郎ゴ前後をうち囲こて。殺ひ怖まを冊さて。登ーするくうの半町ぐうう。わうひへ凸凹の巌角木の根よ降つまー。雪踏ーけて潤ーすあけべ間を傳ふ真清ふの。凍つ応て。処を歩く無氷の光ア。双山刀樹の景甥もこまてうへ過ーとゆうまるう。かうふ太郎い態ぶりある。前後の賊等も油ひへうーと。心許さぢ乳を配ア猶ゆ往ふ十反ぢう。こへ各よゆへ切所ふそ。右ふへ峩ふる巌石のうく聳ーく雲を

凄ぎ。左右の眼も及びざる。数千丈なる渓と切り〳〵く。茨小笹の生茂る。木を流る〳〵谷川の音の幽よりも〳〵く。路中まぐて四尺よ満ぢ。甲斐よりわるて人猿橋よ似て心戦慄をぢろ〳〵。兼く合図やみ〳〵なん太郎が前よ進る。賊共の忽地ふり向と共一後よ従ひ。賊の矢庭よ切ぢて。太郎が足を及ぶ〳〵。傍の谷へ落さえと力を極めて曳と把る。太郎の駆ぢ足をとゞめ。汝等箇程の計畧わるの日ぢ。疾よ密ゆう。かの蟷螂が斧をもて立車よ切ふの喩よもぢ。命ぢうぢの人非人。ぞ日ごろ並を以甘んぢと。いひも終らぢ拔撃ぢ。又を潜りて草賊ども。嗟と叫びく〳〵よ。拔をふ〳〵る白又の切先太郎を中よ切り竜て。ぐ一打と競いかる。太郎の前後よ敵をうけ。深雪の中ゆて進退の歩行も自在ならざるのみ。

路傍〳〵て刃を拭ぢよ。ぐと〳〵く難義ぢうといへど。日頃のよ練よ些も臆すぢ。右を打ふの左よ戦靡け。前をちらひて後を雑立く幾矢と切ふる。矢ぢ切先ゆうぢく。賊共の少一逃足あるぢ。汐ぢりや庇と着いて。前ぢる賊を。西三人矢庭よ切ぢ沂る。血一わよ落る白雪のぢる紅とぞ。ぢりよる。残忍無頼の凶児ぢれば。その友討ぢを待ともせぢ。ぢれ討ぢめてく拔よせんと。體を及ぢえ跳ぢ。竪横よ切ふる。了得賊共の岨ぢよ日頃。孤ぢるものぢるぢ。足の踏所を過ぢ。ぢふの間よぢび。わぢり一上一下と着まのぢ。太郎へとぢ戦待ともせぢ。飛鳥の翔ぢ稲妻の見ぢぢふ會釈太刀ぢ。賊共の多勢ぢりといへぢ。ぢく戦ひ労ぢぬと見へ〳〵怒よ内海太郎の峙よ生ぢる小笹ぢ〳〵よ雪の積ぢて

古今集　貫之

太郎筑波ふ
賊と戦ひ
雪中ふ
過ぎ
時
轉ぶ

わりけるを巖角あらんと思ひきり。見つると甚だく飛び来れば。たゞ
雪のうさりふ思ふと合破と倒るゝを。ひくうや応と草賊等。ゑふ刀
をさし翳しゝで一うちと詰よせる。嗟やとばかり驚く太郎足踏者
んなりゝまとる。切岸急なる岨といひ。力よ足らぬ小笹なれば右めを
伸してうち来る太刀と。支つるゝ身を繙し。起んとすれど怯ぐく、
漸くよ谷底へ陷さるを上なる賊等ども吐と笑ひさし覗き在わるゝ
頃の石掻抱さ。太郎を目めをよ薄ばせ。太郎へ刀ふりけ留りもち
えらへ間よ一丈ばかり。薄べきらへ草も木もなく。ゝで滑ある青壁ふ上
い氷まる癖なるよ。足止ぬとさかうもなく。するくと遠の渓へ陷しそ
無斬なれ。話説分両頭とよ彼牛島舎人へ伍平ゞ貯へ千金を奪ひそ

緊と腹よ括し。玉垂ゞる紙把つ。雪踏ひらく立ぬるゝ。真夜中といひ
降雪の。面を打とを頻りもみそ。進退その度を失ふのころ。足ゝ竈まり
渾身凍へて。心地死べくそふまぞ。高原ありへ二里ふ足ね。佐波とるん
いる所ゆて。路よ迷ひし旅人のさるよ。いひ拵て漸くふ。ひうち鼓
宿りを求め内へいり。草鞋を解さしけるとも。級悉く氷つた。殊よ
指さる亀まりてそれとも怠ぬ主の給いとまをんて。什麼身
うちへ何まるり。いづれへ往路踏差ひて。真夜中るりよあらら泊りと。
呻ひのふり便あさよ。近き頃ふまへ者へあるき。今宵の雪よ寒さも一倍。
さそる辛ドのひりん。雪よ寒へしその人へ且く遠方ふ身を暖め。そうして
ゝ当をあさむべとるる害を引出すのとすく囲炉裡の傍へ

来て渾身を暖むるのみなれど。傍に積おく枯松葉枝さしくべて吹焚るに二人は甚だ悦び這よりて且くその身を暖むるに。やうやく心地も吾にかへり濡たる衣を乾すなどする。その間に主の翁は。白粥を焚あげて。やがて両個に勧むるゆゑ。両個はいたく歓びて食し終りて牛島は主にむかひ懐より。小判一枚とり出して。是は饒りに久しくも今宵の恵なるに報ひ参らせん。ほんの寸志にはあれど。いかで納め玉へと主はこれを見て。手にも把らず形を改め。老身等はかかる豪富の家に育りし人にはあらねど。今宵一夜の恵によりて何条かかる黄金を受べき。固より爰にて旅客を泊めて。旅篭をとるの活業するにもあらず。門の傍に徨ひて難儀なるゆゑにさに温まり寝くるを起出て。お身等を泊め申せしなれど。いはば舎人を

膝をかりしのみ。固より定まる旅店ならず。一夜泊めて何ぞや。その料も粗極めねば。足下は只管に憂くを良きのみにて真夜中に音信ありしのみ。その礼心に報んとならば。などて是を過分しくおしすすげて納めまいらせんと。言葉添へて傍より若党も倶ともに。お身が情によらずば彼両個はこの野路に寒に凍えて命も危ぶべきぞ。主の佐しける媛しきは黄金なれば収らるべき。公闕に納めまいらせてとかへりそ。是を勧むるゆゑ主も今は辞しがたく。やむことなく把りしてさい燈にまうし。視あたりて何やら独言して。傍の佛壇引あけて。かの黄金をそのまま載せ。やがて此方の一間なる所へ燈を移しつつ。さぞかし労れ給ふらんに彼処へいりて休まれよと。二枚屏風に横蒲団揃へて。是処へ閣ゆゑ。両個は猶も礼を演て。その一間へ這入つつ

盛
隘き卧房の一ッ横、二ッあべ〜笹花。そ〜屏風の蝶番ひ。離まへぞの
睦言も。今宵ハそなたそ〜の新花。四辺よ分ぬ巨篠。ふるの夏〜そ九木橋。
ヨくるゆひの危ふさも。意のあるひと奈良阪や。見るみ柏のふるれめて。
うゝるゝ語る妹脊鳥。浮寐の床や住つゝ。病へ間のる夜まの風いと
寒ゆ〜よ目もさえく。な紙過去をかるあべ〜かる処よ主の翁も。床
よいるゝと覚〜さよ傍るる渾あよ低語ゆう。今宵泊め〜両個の
客ハ夫婦のゝめゆそ遥くと。その国ある知音をろゆ来ゝ〜ゝのと安
ゆるゞ。尚よ今宵の恵をゆとて。小判一枚ゆ〜ゝ。これ口笛よ辞しけ
れど。口を揃ゝく受納めよ。ゆめ紙論ふも損るりとゝゆゝり揚てよく
ゝよべ。高原ゝる佐倉沢の。吝老爺ゞ柏印ゆり。遥々ゝ来ゝ〜旅人

其柏印ゆる黄金をべゝよ。ゝ怪〜さといよをゆ。渾あへ回答て中
ゆう。ゆん牙ハいまゞゝりのゝゝぬゝ。伍平許よへ先頃ゝり。二十四五ゝる浪人を。
止めて最大得ゝくゝぶよ娘とゝるゝ中とゝゝ。忍び逢のもゝゝぶ鳥〜
て。人の談も頼ゝぶと。所の人へかゝりゆゝ。ゝゝよ今宵の旅人へかの両個ゝ
めゝん出ゝん。ゝゝゆとゝゝよ女の声音。あゝく遠くの人めゝゝと。窯出ゝよ老
爺ゞ貯へ盗ゝ出て路用とゝ〜。ゝゝらんとせ〜よ雪吹よゆゝゝれ。此処ゆ
宿ゝる式求め〜ゝゝん。ゆん牙へ何と物ゝ出ゝとゝゝ。ゝゝよ主の声よて。你がゝよ
所理ゝり。ゝゝて疑ひめゝべゝゝ。遽莫両個を止めゆゝ。窯よ高原
へ告ゝゝせんかの人音ゝるめゝゝ。得着ゝを計ゝゆれべ。失ゝどゝ被込へ
ゝゝり。殊ゝのハ女児ゞ遠く。ゝゝる式。ゝまとゝりて知らゝ自て居へ

いて美形の肖くと。垂をかくる。此方ある。両個の耳を引そく。風ふく
吹こゝろ愕然と。舎人の玉垂が耳より口ゆわて息を呑。今ぞ。ぞくの主が
口旋。ぞく此処の止まぐて。ぞくの人。飾りよ慮をくして主が暁らべ止め
あん。さんと今宵の大雪ある。夜の明ぬまゆ知ぬ。吾くそれふ
聞して鶏の声と法をのよ。密よことを走りうん。准備をて人のとゆて玉
垂うち点灯をる心ゆて。行くとも。歩行ゆるまゆ。夜の雪吹を厳ふ
眸。伝ひも。ぜん牙と一ゆるまゆ。今宵寝ぞよ鶏が
音と。俱よこち出さらんる。怪ふべうも。行ぐぞと。いぞく。労まー景勢ふ。
舎人も辛ト果けまど。公弱くてるぐとゆ。頬ふくらして白眼つけ。う
あたをいよゆうる。喻くとの家を走り出て往さた街よ倒まゆる。

此処ある主が走ゆ。時を移さぬ。両個勇とるぐえ眼前ゆる。
束ねて後べきゆ。いよく俱よ。ぜん牙ゆ残ていゆ。これ此家を
走らんとゆ。玉垂泥ゆ。命成ぞ。手を争ぜん牙よ離まえ勉
めて。ぞのぐ行くべけまど。路々痛ゆ。ゆて。廃女が真分のゆれふ
おぐ。ぞ点ゆ。今ゆ。ぞゆ。ゆ牙ゆ公を励まえ。ゆ。ぞくゆ。ぞそと脊
掻さすまゆ。玉垂もいて。ゆ。ぞゆ。ぞ行くえ。で牙の労れをいくまえと寒ある
ゆ足温めつ。暖めらまゆ。候ゆどよ。時ゆ。五更とゆ。ぞくて。厨の方の鳥屋
の裡。ゆ。ぞゆいぞ。憎まく。鶏の羽ゆ。一声ふ。彼方此方で鳴ゆまゆ。舎人ふ
国をそと這出く。主が臥房を何ふよ。鶏の声の。ぞけまゆ。折とそよゆまと
玉垂を。扶け起して。携の傍ゆ。人足を浮ゆて。ち出ゆ。脱捐ゆ。草鞋を

把て履ど氷りて弛む緒を漸くにして結びとめ。いざとて甚処を忍び
出るに此比雪は降止たれどその深さ膝を超れば急ぐとすれど一足
づゝ歩ぶにいて障りて夜の明る比及までに一里ばかりぞ歩行けるとて
両個は労を成体にて。朝餉など給べて。ゆるくし甚処を立ちけるが。いとゞ
玉垂は歩行も別てかねたるに足は草鞋の緒に噛切れて甚処彼処より
滴ふ血あふれ。されども寒くしあるに始めのほどは痛もおぼえざりしが随意
あるくしが。后にはいとゞ腫あがりて。はや一足も行かねと辛し畢て耕ひけり

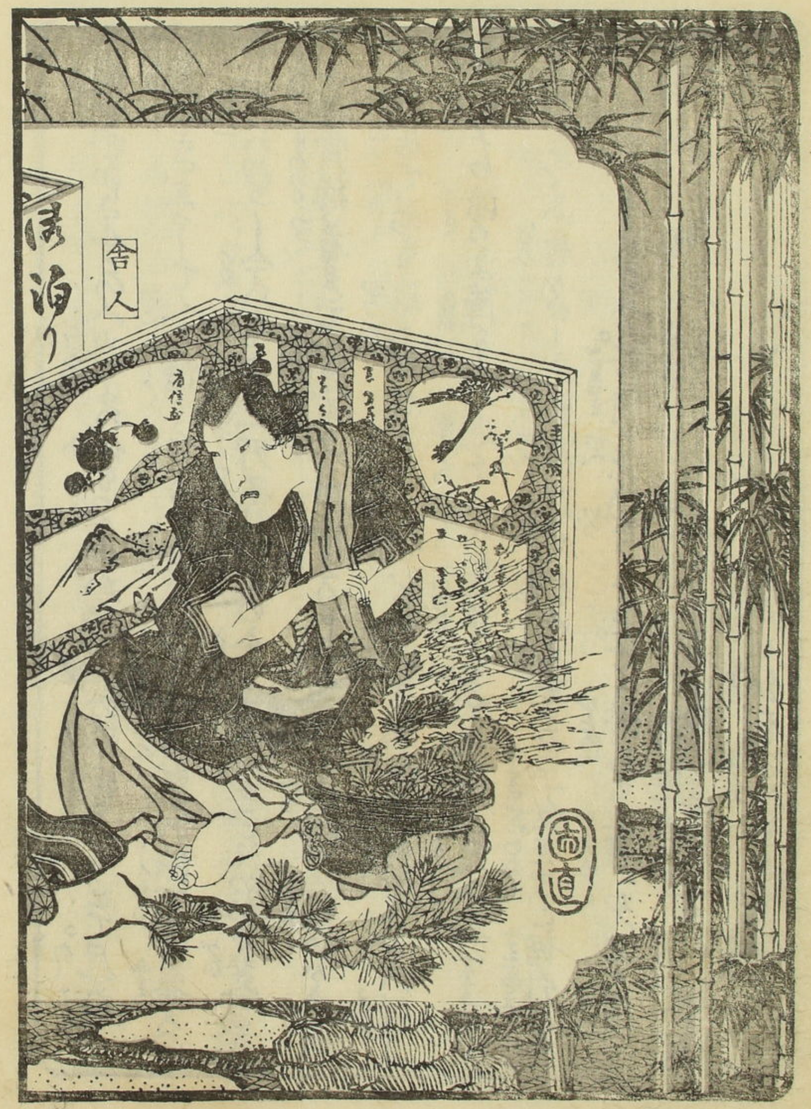
第十回　逢国司玉垂得幸

當下舎人は懐紙と薬とを取いでゝ。滴る血しほを拭ひさり。さなくも痛は
あらで。はや己の剋にも近づきぬるにまで幾千の路をも走らば。我も跡より

追てのかゝらば忽地に辛き目見るらん足の痛みの強くとも心を責て走り
給へと悩む玉垂が手を把て矢庭引に走るほどに。玉垂は声をたて嘆きける
舎人ぬしよ。和子は雄士のなるれば走りもよくし苦もあらんが。かくのごとき
足の悩みありや此処にて命をば捨るとも此うへは。はや一足も歩まず。然れ
ども野中にて久しく耕ふは更に愚なり。馬にも駕にも乗て雇ひく給
してたまはれといふに舎人は眼をとぢて嘆息つけるが女子なる身にては。野
中にて馬や駕の何方にかありや。さばかりの事をしも御身の責なりせば大人しく拳動べし。
これより半里ばかり来れば筑波の麓へ至るなり。彼処には馬もあり物不自由
あらず。いま暫しは甚処迄勉めて走りねと賺して。やうやく引立るに玉垂は一
足ごとに嗟やよと面を皺めつゝ。からくして苦くも。侭に筑波の麓なる野

路ゆゞきーかぐ。こゝに究めて路廣く。平らなる所はあれど。左右へ筑波
の山裾ゆて。松柏森然と生茂り。巖を劈るあり。潺々千て音烈しく。
右へ眺々る原野ふーて。遥に鴻雁の群居を望む。かくて舎人を口、
管ふ。玉垂ぐるを把て。喘々まるゝぞよ。玉垂ぐ足はすゝく痛みてかゝると
こゝを麼破し。眼ゝく血ゝる出て。今はゐゝく労る果ゐはゞ甚処へ
撞と仆て眼を晏ぐゝ舎人はもひ。吾倅も勉めて走らんと呂ゝ出ずは
未ふゝぐんすゝぐ足悩みて。ちや一足ゞも運ぶ能ゝ要時へこゝは詣
いーてよとゝふ舎人は眼を睜。嗟ゝは甲斐なき景勢なる忍びゝ夜
の誓ひゆも。ゝん身と両個走るる。命は何のゝゝと言つるゝを忘れーる。
相縁奇縁と世はいふ吾々とき狼狽者を。善と思ひて別離て苦樂

を俱ゝゝあさんとゝふ。走ゝゝは仰つゞかをりの路歩みをりて足を腫ー
吐息吻き。ゝふーて人を恨ゝ自ゝる。吾はやゝ必ゝゞかの深窓ふ養ゝはゝ
ゝー。昔はひゝー今は今ゝる。一所不住のゝの舎人。ゝん身がゞゝはゝ甲斐なきゝ
女子は黄緑着ゝーはゝ身をゝるの効るゝちや些ゝふ歩むゝ故ひゞゝはゝ
此処ふ居て。ゝゝも追ゝのかゝるゝゝ捕はれて引ゝ出ゝ孤。高原ゝはゝ僅ふ
五里ゝゝ。ゝゝ渡りふ障ゝゝは過ゝゝゝは必定ゝるゝ。ゝん身が足は拘ずゝひて。
有漏ゝゝゝふ居ゞゝと。勃然ゝーて往んとゝるを。玉垂嗟やと裾引ゝる。
ちは在ゝゝゝゝー。ゝゝふ吾倅ゝ。ゝゝ紙ゝるゝゝゝ怖ゝゝ土庫へゝ身を導ー
大枝の黄金を盗ゝて立退ゝ。ゝゝ走ゝゝゝゝゝ身は餘ゝ。ゝゝゝゝ親ゝを
金所ふーてゝゝゝまでゝ着僂ひゝる吾倅ゝゝを。不便ゝるとゝ思ゝゞゝ。


舍人

佐渡の郷の両個宿を煮む
玉垂

男の心と秋の空換るふみ女さたるひさへ。世ふりていくど斯ありのにこころ
るりとへ曉ずて山より高く海より深き親に背き不孝の罪忽地回
ままよりるる。嗟浅ましやと怨ずまべ。舎人へ呵々とうち笑ひ口説さうく
夫ゆど親の恋しくへ。此怒より直に帰まろ。固未和女郎と偕老の契を
るるせーその所謂へ色香に泥しのるるぞ来吝嗇邪慳ふして貪を
溺うる伍平が黄金を奪へんとあの計策るりふ。こる悉くその図ふわう。
既：和女郎がゐ引ゆて土産へへ入ゆめ。ゐひの外ふ黄金少るる。不足ふ
ゆるまど詮方なく。底を拂ひて持ぞう。初め彼彦へ宿り一宵ふ病に
仮託伍平が心を探るふ究めて強欲ゆて桂菴ゐるへ因師と。ゐりて
茶の代と号し。二十金を貪ずる。その時腹に括くる。財嚢のまく投

やーうるへ。コれゐ機密の計策あり。欲に眼の開ゆて。暁ずゆるる愚さ
ふ。ふの裡ゆまどゐ。その怪薄。その虚に乗めて深く親しと。偽ゆて和女
郎と別涙うさへ。見までふ仕課しうまべゐゆ要るし。遠き津（伴る
ひて。和女郎が身も活代るさべ。些の金ゐいるべけまど。仮ふる情を通
いーる。好きのわれば夫のこへ。許し吳んと言に。ひ放ちて褪るるひ。
函をもるずして働くと。王無いこれを哭。始めて驚く舎人が心中。
影ばりるる無頼ども。ひひよりずて情ふ絆され。仇る河を賀ぶし。迷ひ
やるる身の悔しさ。喃舎人刀祢牛島ぬ。然ばりるる薄情さと。考て心
を免しうるへ。こゐ見妾が過ゆて。悔ともかくぬ身の因果。そもものゐへ
此野路ゆて。指る命も今こさふ。覚語といへ情るし。喃々言ふるわう。

やゝ後多へまちの人と。声を限りとよび叫びて。後て期しくる牛島へ。向ひゆく
ぞ一散よ。ゆくと王垂声たりて。尚數回よびわせども。たゞ人く隠る合人ゞ
形へ樹立ふ紛まぎれく失ふるり。跡ふ王垂合破と伏して。涓へつゝぬ悲しこと。
今よりう悔ふ父母の。涙き息を余所るせ。ゞの罪咎へ五百生浮む涙
も亦死ゞの果とゝろべいよく。ゆゝ合せるく。雪解のみと詠とのふ千條の
涓堰ゆゝぞ。ゞを平伏てぞろげ死る。案下其生再苑當国の目代ふ常
陸の介致辰と。ゆゝ人の威勢。近国ふ震へ。同国栗沢とゝ人所よ鉸と構
その清らゝる善美を。ゆく。家隷眷属數多ゆゝ。富栄へゝりるゞ。
奸佞ふて欲深く。民と虐げ賄賂を貪ぶり。松をきく時へで音物の
多寡ふよりて。是非得失を裁断し。善悪邪正の差別を乱さゞ。

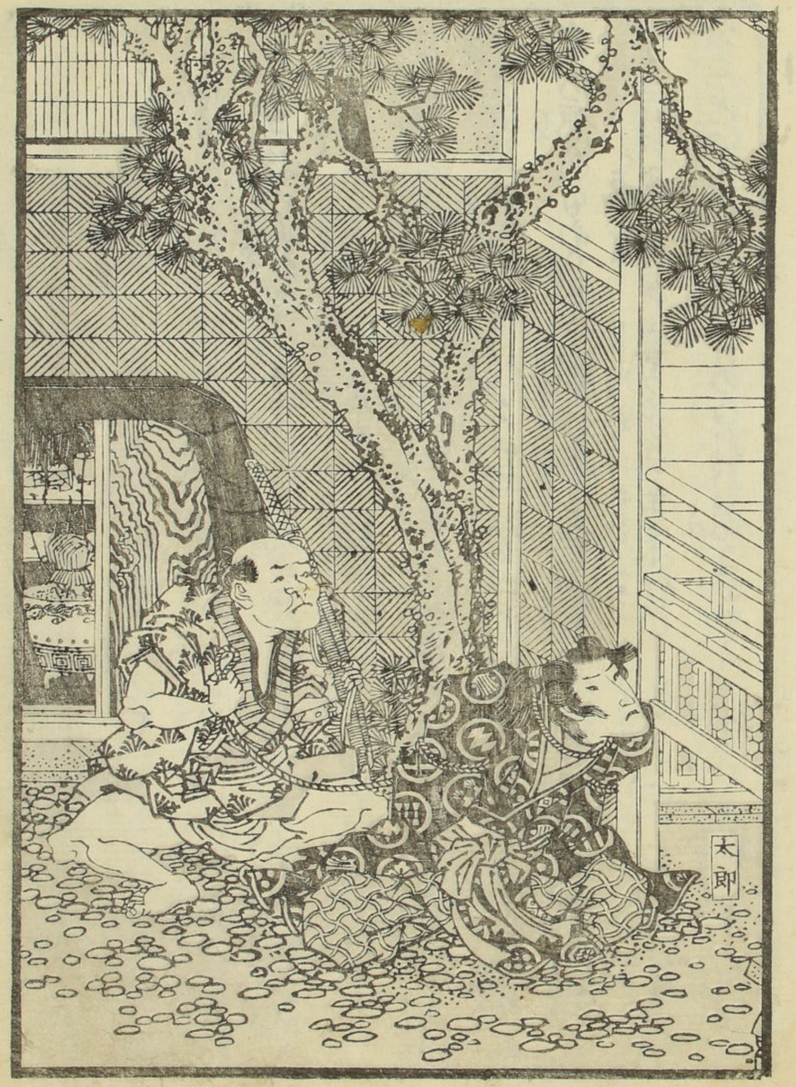
挙動ゆぞ。万民恨ミ哉ゆとゝ人ども。目代の威止るるく。ゝるその下ふ後
ゞよのこゝ。て甚ゞへ奏ゝ式宴め。綾羅の褥玉の床。美女數多を玄国
へて。歌舞飲宴を催ゝ。ゝ人へ酒へ泉のごとくふ堪く散へ林のごくふ
並べく。益夜を分ゝ。ど乱酔して頗る栄曜栄花。落ゝ物の情を
忘るゝるく。涙ゆぞ挙動ゝる。ゝるふもの日雪ゝと降て。一夜ふ積る白
妙の。不二が根ゝるゝ筑波山ゞの香炉峯の雪とゝへ翠簾を捲げて
ゝるとゝ人ゝ。ゝの山の雪ゝ乳色へ弱の蹄よまゝ。ゝるゝ。ゝの母ふ
ゆゝ。殊ふ筒様の雪の日へ水鳥ゞの羽屈まゝて。鶴合ゝるふよ死日ゝ。
と頃ふ借人を調へ。朝まゞ死ゝ。其処彼処を。狩出ゝ。ゝ人の外
獲物も少ゝるゝけゝ。致辰心安ゝ。古ゝ。て雪の日へ。獲物尋し

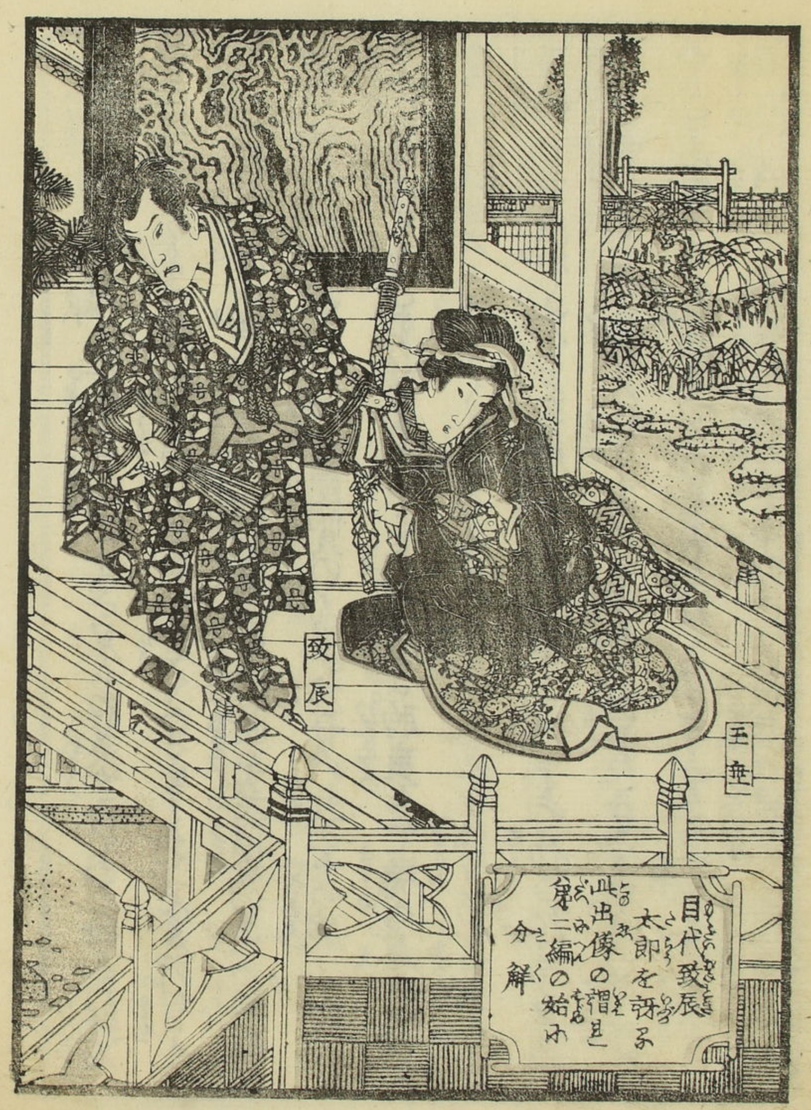
とのひ傳あるべし。ちや午時よりくるまでに十羽ら十三羽の獲物ハ殊
ニ不足なりとハ人々の怠りのゆへ昔の武士ハ主君のゆゑ亡命をも顧ら
ずと物の本にハあれども。体色これより駆近して。ゑ足の凍えたるを
厭ひく。彼処の畔に星すくなる。鳥のゐるまで徑遠く空しく過るハ
何ぞや。畢竟君と君とせば。侮りを犯すの心なるべし。速莫吾もまた。
その心にて扱ハんに当時いかく恨なるに。体色ごとの空戯武士ハ妻子
を養ふ扶持まで把らず畜ちくこそ遺恨なれとわるくハ怒りわるくハ
怨めば。近習ら甚怒り額着て努ゆるまくが怠りてゑ足を厭ふこれ
いとど近習風に兼ねまバ。てるる筑波の山中に太郎ちいの強盗住て人
を悩ましいのるる。尤君ハ當国の守ゆゑ在せば強盗ゆゑ怖ず

去べきなど。浪ぬらハ無頼の校のゆく。生死をさゆ顧ざべ。れく鳥ハ
獲ん。あに遠く走りて四馬廻りの。ゑ薄るべ水鳥ゆ。実体ゆゑの
ゆゑんと。夫ら武士ハ得ったりと口を揃へて。ゆけ。致辰こを稽古
て。忽地ようち殺ひ。強盗のゆへ。ゆゑ粗ちの荒増を。ゆゑれどいまど實
否を糺ぐるゆ。誅伐をゆせるこ。ゆゑ当国の守りとして。賞罰刑法を
掌るゆ。ゆゑ無類の賊ゆゑ。ゆゑもあの日の本ハ住べきものゆゑを侮ア犯
さんやそハ故ちゆ遠慮ゆ過ゆ。然ハゆゑゆゑ身の上をゆゑて遠くハ
きゆらずとゆゑ。聊神妙ゆゑと。始めの怒りゆ引かへて。面をゆ
和らげ。ゆゑ。ゆゑよくゆゑハ放てゆゑ。筑波の山裾ゆゑ。強盗
ゆゑの襲ひまゆゑ。ゆゑのやわらんと心中ゆ。五分の怖ゆゑて生ゆゑ。ゆゑて士卒

を一所より纏め。前後左右の隊伍を調へ。徐々すすんで山裾を去んとする
と。溪川の此方より一人の女わらべ風俗隨一うるはしく裾も袂も雪あらはに
ぞ濡れく對居るさま。乞食非人の類よりは。こゝに詩一と馬を住めて。
近習の武士共呼近づけ渠が宜しく旅人とこゝろゝ。奈何ゝゝゆゑ雪
中よりて。独對居はやゝ怪しき。その訳を問へ。その命より役ひ近習の士ども
とまをすとありて。あや女身を擡げよ。こゝまで旅人と知り。連にゝ入べき
人もなく。殊より深雪に埋まりて。跪き居るは何ものぞ。こゝは当国の目代
ゆゑ。常陸介致辰ぬ。今日獵狩より出るひとの所を通行わるゝ。詩
一に汝が体。絆の仔細を糺れと。詩あるそゆゑ女頓て身を擡げ。
いとれて女は怕ず。形状改まり髪の毛を掻あげ。ゝゝ揚れ

べ容貌きよらにて麗し。年も二十ばかり。美女ゆゑ。わりけまべ致辰
こゝに代るゝ。ゝゝ馬代もゝ。近くゝまくよくこまべ。眉も
遠山に没し月に似て。丹花の唇芙蓉の眸。皓を抑髪の色は漆れば。
春のおぼろ乱れ。心を蘭質のゝゝ我せば。我の手の脆しかゝる
美人の世ゆもまことゝ。ゝゝゝゝ。ゝゝ漫に胸裏さて魂も身は配ね
まで。ゝゝ猶つゝと進ゝゝ。ゝゝ女にとを仰ゝ。救ひの泪
を袖よりゝゝ。ゝゝ。ゝゝ方ゝゝの眼に障りて。仇ゝ。ゝの
上を語まゝ。ゝの命は姥ゝ去ゝ。言も面ゝゝゆゝて。ゝの薄命の
ゆゝゝあきゝ。ゝち捐ゝゝゝ。俯ゝ
面影は西施が歯痛の俤もかゝやゝんと致辰。這回は自ら声をあげ。


太郎


致辰
玉垂
月代致辰
太郎を呼ぶ
此出像の間は
第二編の始め
分解

やよ處女何をか懷らん。まこの此国の月代ゆて。鰥寡孤獨の窮人を。恤むなの身の勉ふ。仔細を聞てその上ゆて。計らふひふもわぞ
ろう。頓々かくれとゝひけまべ。處女いまこも点ぞりめげていと恥くゝ待れ
ども。やさ強び無礼ろう。身のうく明々地ゆらゝ行くゝん。そもく妾ハ下野ゆて那
須野の原の片傍。小野一斉といふ西師の女見玉垂と申ものゆ行ろ。此
わど続きて父母ゆ口ろ是。外ゆ知音のものもろけれべ暮ろ方折ろゝゆ。
妾ごとを醜女をも。不便ろうてや嫁ろせんと誘ふくさ。やりひまど此身よ
少しの愿ひもわり。まこと鄙人の妻とろう。管のゆ笠ゆ田植唄謡ふも望し
かゝぐれべ。屋否ぞて。妾ろ身ハ。手来仕ひ久作い。六十わまりのゆ羽よわ
ろうまどゝと信実ろるものろれべ。張ふかゝろひ故々を。心強くもこちゆて。

この国段間といふゆ母の兄公の在けまべこれを便ろて兎ふかゝゆ。
身の落着をも潭らりんと。奈ろ一処ふまの人も去年の春辞世ゝく。跡
ふ子といふ者もろ。其家退散ゝ行ると。ゆて特ろ云矣ろ又今さら
ゆ詮方ろ。ゆて其の処をゝ去ゝゆ。行ろ雄子の久作とろち潭らゝて
是よりゆ武蔵の国府へ赴うんとその街ろくからすゝふ路の按内を乞ろ
ざれべ。ゆろ是ゆ方ふ呻吟ゝふ生憎雪の降ろ。尚さろ前後も見知
ぬ。其処ゆもろうも迷ゆ苦ゆふ。ゆて出會て行李盤纏を奪
りんと。ろる武士ろ。と久作ゆ挑ろ。ゆ敵ろゆ敵ろ。ゆ老の身のゆ。ゆ者ろゆ敵ろ。
敢ろく敵ろ。ゆ行ゆ。ゆ乳も消へ怖ゝく。足ふ任ゝて逃呻吟を。
賊等ゆ妾を捕へんと。跡を慕ゆて追ふ武捕へらまゝと。良茅の茂

まる沼に身を潜め。漸くにして引剥の賊が難をバ免れ玉ひしかども。
さて杖柱と情みける供を失ひ玉ひ身一つを佐けるものも盤纏へなし。西
も東も知らねバ。ある武士ゆもあらバこそ途方もなくなほ女子の身にて
いかゞせん引剥の賊に捕へられ身を汚されねを幸ひにてかの久作が跡追
かけ。冥土の旅へと思へども。子得ずに命ながらへて。朝まだき起きあがりて東西
南北心のまゝ痛でも途方くれし。殊には烈しく走りぬれバ。故ゆやあらん両足も。壊
まし爛れて今ハはや。一足も運ばれねバ。昨注さる死身の上と思ひ窮め
てこの渓川へ沈みて魚の餌とならバ。生るに増る功徳ならめと。かねて覚語
ハしながらも心細く障ひて。死なんとする人々に見咎められしぞ嬉しき。
実しなるに偽りて。語もあえず泫然と泣伏す。愚妾が心の裡。汲とりて致辰

が数回嘆息し。曽山の常言ゆも。十分の標致あるべきハ十分の薫ありと
文にもいへる係る事に衰后ゆもかく遠く容貌ありて。されども薄
命ゆ非ずや。迚も女ハ妬心で王の寵ゆも勝るいふ愛さる者の限
あれバ不早身して其身を過るハ稀。国の月代今より汝を得たるにて。
悪の死なりて終ゆせしかいと心が迷ひて。心なげにいふぞ悲しき近習
の者に命じて其衣装を早居させ足の漏まで見て。今より我が律へ
そのとりに此時。王手ハ始めて完爾と打笑ひ思あと懸想するを着て。
とハ勿論なる命ゆもあひぐなく此時ゆて事の刀禰の召の連ぬるや
穏しかべき辞させるへと辞しけれバ致辰頭を左右に振り苦みし吾許すに。
何条妨あるべきぞ辞むハ却て無礼なりいざ頓々と促すに否むべき詞

もるゝ心のうちは玉垂の山々の幸ゆゑ歟方々の情を受る辰巳の方の牛島は伴なひ明暮辛苦せしより遂に彌増の僥倖なれいゝわけ人の一生は流るゝ水の如くといふ諺ゆゑ隔てなく皇を歓びて佛々素物〳〵者まで舟遊び雑人ら肩を揺れて我長ず人数の跡まつ光てゆくかる処の山岸なる茨は積る白雪か一度まなれば人々皇を怪之つ立止まりて佇とあるはこの辺何も分ぬ異様に打扮癖者の狂ひ落るゆてやりなさいたちや山賊出まはる。一矢は射留て巻言はせんと弓は矢をあるを者ゆゆ。弓一打て討ぬんと刀の柄を握るゆゆりて上を下へと走いろ。早竟皇八何人そ皇の玉無歟いろ。何ぞのるとうんん第二編は詳こう

拄石傳初輯巻之五終

物語作者

狂訓亭爲永
松亭金水

巻中出像

歌川國直
歌川國芳

新田功臣 拄石傳 第二輯 全本五冊 近刻

初輯に続く物語にて世間に称する新田の名臣栗生篠塚畑亘旦等の忠義の義貞朝臣の功績を絵に写し切瑳琢磨の功績を絵に写し義貞朝臣の麾下に属して遂に彰名の誉を結ぶ出板の節は金彩を編みて刊行

板元 鈴白

尾州名護屋 書林
永樂屋東四郎
須原屋佐助
平林庄五郎
江都書林
樓本平吉
廣屋太七郎梓
天保五甲午歲春正月發市